

家族からの逃走：『ジャングル』を読んで

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本合, 陽 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008883

家族からの逃走—『ジャングル』を読んで

本 合 陽

1905年2月11日、『アピール・トゥー・リーズン』に掲載した公告で、アプトン・シンクレアは、『ジャングル』について次のように予告している。

この作品には、利益のために男や女の労働を搾取するシステムによって、人間の心がいかに破壊されるか示されるだろう。大衆の心を揺り動かし、産業というやかんの蓋を吹き飛ばすことだろう。この本で社会主義がどのように描かれようと、もちろんそれは差し迫ったもののなのだ。色々な挿話によって明らかにされるはずだ。説教はない。表面上この小説は『アンクル・トムの小屋』と似ていないが、根本では同じものであるだろうし、そうあろうと心がけている。それはシステムの働きを示すだろう。不正利得がどのようにして女や子供を殺していくかさまざまな例を示そう。日常生活の出来事が主題である。色んな出来事やわくわくする事件があり、生死をかけた努力や悲しい悲劇、人生の悲劇があるだろう。¹

さらに、このようにも述べている。

私はあそこにて見てきた。だがあの闘争や、続いて起こった精神的、肉体的崩壊を知るためにシカゴに行く必要などなかった。工場のこと、ひどい大気のこと、事故のこと、混ぜものをした食品のことが描かれるだろう。至る所にストや雇用者連合があり、収賄する政治家、そして社会主義者がいるだろう。おそらく白人奴隷売買も出てくる。自由を求め渡米してきて、職のない外国人がいる。(中略)前にも言ったように、この本は読まれるように書くつもりだ。ストの大詰めにあたり、主人公の妻は出産する。彼女は誰にも付き添われない。しくじらなければ、ただ事実を語るにより、実りある悲劇を生み出せるだろう。礼儀を欠くこともないだろう。ストは

失敗し、面喰らう。妻は追い立てられ死ぬ。彼はしばらく赤ん坊の世話をし、毒入りミルクや混ざりもののある薬を飲ませ、ついには赤ん坊も死ぬ。それから主人公は家を出、アナーキズムのことを耳にする。アナーキストと、アナーキストを生み出す社会の犯罪や恐怖については、まだ小説に書かれていない。主人公は爆弾を作っている。それから社会主義のことを学ぶ。一人の貧しい、飢えた仕立屋、社会主義者であり、革命の真のヒーローが全ての問題を明らかにしてくれ、「ジャングル」の奥の奥まで白日の下に曝すのである。²

作品が発表され、当初は好意的に迎えられた。いやむしろ激賞されたとすら言えるかもしれない。それ故シンクレアが、「私はフィクション作家の通常の特権を行使することはありませんでした。空想で書いたものはないのです。潤色などしていません。ただ劇化し、解釈しただけなのです。」と、自信たっぷりに述べているのも理解できる。³ だがその後、様々な批判も出てきた。それに伴って、作者自身もこの作品に満足していたわけではないことがわかってくる。

ブルックスは、「シンクレアは人間性にそれほど興味を持っておらず、人物にあまり感情を抱いておらず、寛容でもなかった」と述べ、人物造形の問題点を指摘している。⁴ また、シンクレアの描く労働者階級、社会主義の描写には、どうも彼の中産階級の色彩が色濃く影を投じていて、本当の意味で労働者階級の物語になっていないのではないかという指摘もあり、⁵ 宗教へのこだわりが社会主義へのこだわりの背後に見えかくれし、見いだされた社会主義はキリスト教の再発見にすぎないという説もある。⁶

シンクレアは、「説教」という形でしか社会主義を作品に持ち込むことができず、「革命の真のヒーロー」に全ての秘密を暴きたてさせることもできなかった。彼は宣伝文で述べた通りの作品を書くことができなかったのである。私はこの事実注目し、この作品を読み直してみたいと考えている。

作品を不十分なものにしている原因は、作品後半部にある。作者自身この部分をなかなか書くことができず、途中で一時放り出してさえている。伝記作者ハリスによれば、「彼は麻痺してしまったのを感じた。生まれて初めて書くことができず、作品を終わらせることができなかった」そうである。⁷ シンクレア自身、健康、金銭上の問題、また妻の調子などから、計画していた二度目のシカゴ行きもできなかったと言い訳している。その事実を指摘し、十分な時間と力を掛けることができなかったから不十分なまま終わったのだらうという見方を

する批評家もいる。⁸ また、「シンクレアは、個人的にも政治的にも、また創作上でも生活の危機に瀕していた期間にプロットを練っていたので、お金のかかる教育を受けてきたプロの作家であるシンクレアと、すばらしい最初の章に登場する卑しい生まれの労働者との間の溝が深まってしまったのだ。アングロサクソンで、プロテスタントのプチブル知識人がリアリズム、社会主義、異質の労働者階級、純文学を打ち負かしてしまったのだ。」という解釈もある。⁹ しかし、このような解釈は、私が作品を読んだときに感じた作者の強烈な男意識を十分に説明してくれない。

作者はこの作品にとりかかり始めたとき、「データはあったし、どんなストーリーかもわかっていたが、登場人物を持っていなかった」と言っている。¹⁰ また、作者はシカゴに取材に行き、偶然移民の結婚式を目撃し、登場人物を見いだしたのである。さらに、執筆中に行き詰まり中断してしまうのであるが、それは主人公の妻と子の死の場面と主人公が社会主義に目覚める場面との間、24章あたりであるらしい。¹¹ 私としてはこのあたりにこの作品に迫る一つの鍵があると考えている。その意味で、母親を養わねばならないという強迫観念から生じる、作者のマンフッドへのこだわりを読みとる説は注目に値する。¹²

作者が描きたいと思っていた作品と、描いてしまった作品との間にある溝は、それ自体作者と作品の関わりを雄弁に物語ってくれる。またその関わりは、作者と作品の距離を見定める一つの指標になると考えられる。作者と作品の距離というものが、作品の質を大きく左右すると私は考えており、「隠蔽」と「解放」というキーワードを用いその距離の問題について考察を重ねてきている。その意味で、この作品は非常に興味深い問題を与えてくれた。作者の意図した作品と、私たちが読むことのできる作品とのずれを検証することにより、作者が自分の無意識の願望を解放しようとし、しかしそれを正当化するためある種の隠蔽が行われ、奇妙な物語になってしまったことを、この小論で分析してみたいと思っている。

II

作者が意図していたのは、主人公が社会の歪みを身を持って体験し、その結果ある社会主義者と出合い、社会主義に目覚める様を描くことであった。社会主義に目覚める直前の22章、主人公ヨーギスと再会した妻オナの従姉妹マリジャは彼に向かい、「私たちはあまりにも無知だった。それが問題だった。」(347)と述べている。この言葉からもわかるように、ヨーギスは自分自身と、自分を取り囲む社会の状況に目覚めねばならなかった。

ヨーギスは、アメリカに渡ってきた直後には自分の若さと力を過信していた。何か苦しいことがあると彼の言う言葉は決まって「もっと精いっぱい働くよ」(23)であり、「まるで大人の女のように、夫を持つことはすばらしいことだった。どんな問題でも解決してくれ、大きくて強い夫を持つことは。」(23)と妻のオナに思われている。そのような彼には、組合の主張は理解できないし、したがって共感などできない。

その男たちが望んでいることは、速度を上げる傾向を止めることだったと、彼にも徐々にわかってきた。彼らは速度を落とそうと最善を尽くしていたのだ。なぜなら、ついていけない者には殺人的な速度であるからだ。しかしヨーギスはこのような考えには同情を感じなかった。彼は自分の仕事をやるだけだ。だから残りの連中も自分の仕事をやればいい。やれる力があればねと、彼は宣言した。もしもやらないのであれば、どこかよそに行けばいい。(72)

ヨーギスは他人の痛みに対する同情を持たないばかりか、「すばらしい機械の歯車」であることに「誇り」すら感じている。(41)

若さを過信し、同情心を持たないヨーギスが、社会主義に目覚め、自己を変革するためには、何か大きなきっかけが必要だろう。従って彼の社会主義への目覚めのきっかけと、その目覚めの部分を子細に検討すれば、作者がなぜ自分の意図に沿った形で作品を完成できなかったのかが明確になると思われる。大きく言って二つの点から、この部分を問題にしたい。一つは社会主義に目覚める演説の中で、何が一番ヨーギスにとって重要であったかという点であり、もう一つは、社会主義に向かわせる必然性を作り上げるとき、シンクレアはどのような状況設定をしたかということだ。

まず演説の問題から検討してみよう。社会主義に目覚めるきっかけは、乞食同然となり果て、たまたま暖をとろうと迷い込んだ集会での演説にあった。演説はアジ演説の常で、言葉の調子はいいのだが、それほど情報は多くない。その中に、「目から鱗が落ち、足枷が外され、感謝の叫びを上げ飛び上がり、ついに自由の人となって歩みだすだろう。自分で作った奴隷制度から解き放たれた者。二度と畏にはまらない者。どんな甘い言葉にもまるめ込まれることなく、どんなおどしも通用しない。」(361)とある。世界中に「同じ呪われたシステム」があり、餌食を求めているののだが、「抑圧」と「無知」によって、人は、「自ら

作った奴隷制」の「牢獄」に、「罌にかけられ」陥れられている。そこから自己を解放し、「自由の人」にならねばならないということが説かれている。(358-66)

この演説を聞き、ヨーギスは「ただの男ではなくなり」、「思ってもみなかった力が体中に沸き起こり」、「昔感じていた希望やあこがれ、悲しみ、怒り、絶望」が戻ってくる(366)。ヨーギスは「心を殺し、希望を持ち奮闘することを止めてしまっていた」ことに気づく。さらに「彼の心の中に新しい男が生まれ」、「彼にとって世界は全く変わったものとなり、自由になった、自由になったんだ」と感じ、「彼はもう環境にもてあそばれることはなく、意志と目的を持った男になる」のである(368)。

「牢獄」や「罌にはめられている」といった言葉は、当然資本家に搾取される労働者の現状について使われていると考えられるが、実はこの作品の中で違ったシチュエーションにおいても用いられている。

罌という言葉について言えば、一番最初に用いられているのは労働者についてではない。そもそもこの作品は、主人公ヨーギスとオナの結婚披露宴、ヴェセリジャの場面から始まったが、その結婚について用いられているのであった。

一年半ほど前のことであったが、ヨーギスは家から百マイルの馬市でオナに会ったのだった。ヨーギスは結婚するつもりはなかった。男が結婚するなんてばかげた罌だと一笑に付していたのだった。しかし、ここで、彼女に一言も話し掛けることもなく、数回ほほ笑みを交わしただけで、困惑と恐れとで顔は赤いどころではなかったが、気が付くと妻として彼女を売ってくれと彼女の両親に頼んでいたのだ。(28)

また「ヨーギスは結婚するなんて馬鹿だった。自分を縛り付けてしまい、自ら奴隷となったのだ。」(167)とある。つまり、「罌」と「牢獄」という言葉は、搾取される労働者階級を意味するとともに、結婚によってもたらされる状況のことも指していることになる。

次に、「彼の心の中には新しい男が生まれていた。」という描写に注目したい。知らず知らずに資本家に荷担してしまうような考えを持っているという、自分で作り上げた牢獄から解放され、社会主義という全く違った考え方にに基づき、本当の意味で自由になるから「新しい男」に生まれ変わるのであるが、実はこの「新しい男」という言葉は、これ以前に印象的な場面で用いられているのである。

ヨーギスは妻と息子の死に続く場面、22章冒頭で、息子の死のショックで家を飛び出してしまい、鉄道の踏切のところまでくると、ついには列車に飛び乗ってしまう。列車が動き出すと、残りの家族を置き去りにしたことに対する良心の呵責と戦うが、ついに心を決める。そのときこのように描写される。

列車が再び動きだしたとき、彼は自分の心と戦った。両手をぐっと握り締め、歯を噛み合わせた。泣いてはいなかった、泣きはしない。さあ終わった。やってのけた。今夜、もう何もかも投げ捨てて、自由になるんだ。暗く、忌ま忌ましい悪夢のようであるかもしれないが、朝になれば新しい男なのだ。(254)

家族のことを本当に愛していたとすれば、そもそも家族を失った者があのような形で失踪するだろうかという疑問もあるが、ここでは何故この失踪によってヨーギスが「新しい男」と描かれなければならないかに注目したい。作者の意図からすれば、社会主義に目覚め、初めてヨーギスは生まれ変わるべきなのだ。家族を失ったショック(?)で、失踪し、放浪の旅に出ることで生まれ変わってしまったら、社会主義などに目覚める必要はない。今の場面に続けてさらにこのように描かれている。

今自分の人生のために戦っている。彼は絶望して歯をきしらせた。俺は馬鹿だった。馬鹿だったんだ。自分の人生を無駄にしてしまった。自分自身を台無しにしてしまったんだ。いまましい自分の弱さのために。だがもう終わった。そんな弱さははね除けて、根こそぎにしまえ。もう涙も優しさもおさらばだ。もう十分だ。そいつらのおかげで奴隷に売られてしまったんだ。さあこれからは自由だ。足枷を引きちぎれ、立ち上がって戦うんだ。とうとう終わりが来て嬉しかった。いつかは来なくちゃなかったんだ。今来たってよかろう。女や子供の生きる世界ではないんだ。早くこの世から出ていったほうがいいんだ。(254)

何やらわかりにくい言い方になっているが、この文脈に関する限り、彼が奴隷に売られる原因となるのは涙や優しさである。それはつまり家族に対する感情である。この引用の後半、女や子どもについて述べているところはどうか。一読すると死んでしまった妻と息子に対する感情を振り切り、割り切ろ

うとしているだけのようにも思えるが、その気持ちが彼を奴隷に売ったとあるのを考えると、彼のことを奴隷に売ってしまうような感情ならばそんなものは持たなくてもいい、そもそも妻や子どもを持つこと自体間違っていたんだ、ということにならないか。

ヨーギスにとって問題であったのは、「自分で作った牢獄」に「奴隷」として売られてしまっていることに気づいていないことだった。それに気づくことによって、彼は解放され、自由になり、新しい男に生まれ変わるのである。ところが今の22章を読む限り、奴隷に売られる原因は、資本主義の問題ではなく、家族に対する感情であると考えることができるのである。

次に、もう一つ別の観点からこの問題にアプローチしてみよう。ヨーギスが社会主義に目覚めることは、作者の一番重要な問題だった。ヨーギスが社会主義を受け入れるためには、彼はこれまで培ってきた考えが徹底的に間違いであることを思い知る必要がある。そのとき初めて、世界がすっかり変わるほどの衝撃を受けることが可能なのだ。

社会主義と出会う直前、27章の最後はこのように描かれている。

ヨーギスは社会の地獄の最奥まで覗き込んできて、その光景にもう慣れてしまっていた。しかしどんな人間も墮落して、おぞましいと思うとき、なぜかいつも自分の家族を除外していた。愛していたからだ。そして今この突然の恐ろしい発見、マリジャは娼婦で、エルズビエータとその子供たちは彼女が恥をかくことによって生きていた。(中略)彼の心の奥底で困惑し揺すぶられ、あまりに長く眠ったままなのでもう死んでしまったと思っていた記憶が彼のなかでうごめいた。昔の生活の記憶、昔の希望、昔のあこがれ、体面と自立の昔の夢。オナが見えた。彼女の優しい声が彼にうたえていた。息子アンタナスを見た。(中略)それら全てがどんなに恐ろしく彼には思えたことか。そして今、マリジャがあなたは馬鹿だったのよというのを聞きながら半ばうなずいていた。妻の名誉など売っぱらって、それで生きればよかったのよというのを聞きながら。(中略)

こういった全ての感情を、ヨーギスはずっと感じなくなっていた。その感情に悩ませられることがずっとなかったのも、再び悩ませられることなどないだろうと思っていた。彼はなすすべもなく、罠にはめられ、その感情のためにろくなことはなかった。そもそもどうしてそんな感情に悩んだりしたのか。その感情を押し殺し、心から締め出してしまうことがここ数

年、生きていく上でやらねばならないことだった。知らぬ間に彼をとらえ、防ごうと身構える前に圧倒してしまうことでもなければ、もう二度とその感情に苦しむことなどない。彼は彼の魂の昔の声を聞いた。魂の昔の亡霊が彼に手招きし、彼の方に両手を伸ばしてきた。しかし亡霊は遠くはなればんやりしていて、あいだの溝は暗く底無しだった。亡霊は過去のもやの中に消えていった。それゆえ彼の魂のマンフッドの最後のかすかな光がきらめき、消えていった。」(349-350)

長い引用になってしまったが、この直前の場面で、前に引用したマリジャの言葉、「私たちは無知だった。それが問題だった。」という言葉があったのを考えると、マリジャによる世界の真実と、それに衝撃を受けるヨーギスを、この部分は描いていることになる。その真実とはこうだ。ヨーギスの見た「地獄の最奥」での「墮落」から彼の家族といえど免れることはできず、生きていくのに売れるものがあれば、なんでも売るのが正しい。

このような考えは、妻の貞節をけがされ、かっとなってなぐり込むヨーギスには受け入れがたいものだ。しかもこの言葉を語るのが、マリジャであることに大きな意味がある。ヨーギスにとってマリジャはどのような存在であったか、それから彼の「マンフッドが消えていく」とは何を意味するか考えよう。

ヨーギスは、娼婦になったマリジャに会う前、マリジャの消息を聞いたとき、次のように思う。

ヨーギスがパッキングタウンを離れてから、一年も経っていなかった。監獄から抜け出したもののように感じていたのだ。そして彼が逃げていたのは、マリジャとエルズビエータからであった。(342)

ヨーギスにとってマリジャは心の重荷になる存在であった。そしてこの作品に最初に登場するのが実はマリジャである。作品の冒頭部分で、ヴァセリジャに関する全てのことが「母国の伝統」に則って進行しているかどうか、監視するのが「彼女の任務」だったと述べられている(5)。ヴェセリジャと呼ばれるこの披露宴の定義を読めば、ヨーギスにとっての彼女の重みがさらにはっきりとしたものになる。

彼らはヴェセリジャをあきらめるわけにはいかなかった。あきらめること

は敗北することを意味するだけでなく、敗北を認めることでもあった。その二つのことの違いによって、世の中は回っているのだ。ヴェセリジャは遙か昔から伝わってきている。その意味とはこうだ。人生で一度だけでも鎖を解き、翼を感じ、太陽を見ることさえできれば、洞窟に住み影を見て暮らしていける。いろんな心配事や恐いことがあったとしても、人生なんて結局は大したことではなく、川面に浮かぶあぶくにすぎず、ジャグラーが投げててもあそぶ金色の玉のようなもので、上等の赤ワイン一杯のように、ぐくりと飲んでしまうようなものなのだとすることを、人生に一度だけでも確かめることができれば。こうして自分が主人であると知れば、人（男）は苦しい仕事に戻って行って、残りの日々をその記憶で食っていけるんだ。(18)

いったん結婚し、盛大な披露宴を持てば、残りの人生はいくら苦しくても、披露宴の記憶でやっていけるのであるから、現実には敗北していたとしても、敗北していると認めなければ敗北したことにはならない。この部分、わかりやすく言い換えれば、一旦人生の華やかさを味わうことができれば、後は過去の幸福という幻想の世界で生きていけばいいと言っているのである。

このような意味を持つヴェセリジャを取り仕切っているのが、マリジャであった。それ故、ヨーギスにとって彼女は結婚という伝統の守護神となるだろう。また結婚とは家族を作るための儀式であるので、マリジャは家族の象徴ともなる。その家族の象徴たる守護神も、「社会の地獄の最奥」の「人間の墮落」を免れない。それが、娼婦となった彼女が金のためなら娼婦であることも仕方がないと述べることの意味なのだ。つまり、守護神さえ墮落するのであれば、ヨーギスは家族の神聖な不可侵性をもう信じる必要はないのである。

そのようなマリジャと接し、ヨーギスのマンフッドは消えていく。ならば彼にとってマンフッドとは、家族、家庭へのこだわり、つまり家族を養い支えねばならないという強迫観念であったと考えられる。また現実には支えることなどできなかったのだから、できないにもかかわらず、できると信じ込むこと、できるという幻想を持つことであった。

III

さてここまで考えてきて、何か釈然としないものを感じてしまう。マンフッドという幻想はヨーギスにとって重荷だった。そんなものは捨て去りたかったに違いない。もしも彼が自らの意志でその幻想を打ち捨てていたならば、こ

の物語は脱ジェンダーを描く非常に現代的な物語となっていたであろう。ところがそうはなっていない。その点が、私がこの作品で隠蔽と解放の問題を考えたと思った点なのである。読み返してみると、この作品には様々な仕掛けが張り巡らされている。

オナにとってヨーギスは、「どんな問題でも解決してくれる大きくて強い夫」(23)である。また彼は、「オナに働かせるつもりはない。そんな類の男じゃない。それに彼女もそんな女じゃない。俺のような男が一家を支えられないなんて、奇妙なことなのだ。」(54)と公言してはばかりず、「一家の男が決定し、やり遂げねばならない」(61)、「彼は彼女を守り、二人をとりまく恐怖に対し、彼女に代わって戦わねばならないのだ。彼女には彼しか頼る人はいないし、彼が頼れなければ彼女は失われてしまう。彼女に腕を回し、彼女を世間から隠そう」(91)と考える男である。ヨーギスは一家を経済的にも、精神的にも支えるのが男というものであると考えていて、オナはそんな夫を持てることをすばらしいと感じている。その意味で、二人は共通の幻想を抱いていることになるのだが、作者はそんな二人をこんな風に紹介している。

オナは金髪碧眼、一方のヨーギスはゲジゲジ眉毛で目は大きく黒く、豊かな黒髪がカールして耳にかかっていた。要するに、二人は母なる自然がしばしばあらゆる預言者を混乱させてやろうと思う、不釣り合いで、ありえない組合せだった。(6)

二人は共通する幻想を抱いていながら不釣り合いな組み合わせであると設定することにより、ヨーギスがオナを支えることに失敗することに対し、作者はあらかじめ免罪符を与えている。また「彼女を守らなければならない」と思ったときも、さりげなく「彼女には彼にはすばらしすぎる」(91)と言葉をはさみ、ヨーギスの「醜い自己」(91)と対比し、彼を貶めることにより二人の距離を設けている。

またヨーギスに引導を渡す役を、作者はマリジャに負わせているが、その背後に私は何やら悪意を感じる。マリジャは、「肩が広く」(5)、「男も悪魔も恐れることなく」(54)、「男のような筋肉をしており」(127)、「有能で男の仕事をこなす」(126)男と対等に渡り合っていく女性である。その女性が娼婦となり、仕事への誇りも持てない運命に陥ると、作者は設定しているのである。

オナが職場の女上司にいじめられる場面が二度ほど出てくるが、「オナには女

性監督が部下の女の子に結婚してほしくないのだと思えた。おそらく彼女は醜く、自分も結婚していなかったからだ。」(92)とか、「オナは今ミス・ヘンダーソンが彼女のことを憎む本当のわけは、彼女がきちんとして結婚した少女であるからだとわかった。」(129)といったように、未婚で年配の女性が若い女の子をいじめるというステレオタイプを、作者は何の批判もなく用いている。男勝りで未婚という点で、マリジャもこのステレオタイプに当てはまり、ヨーギスが、さらには作者が、彼女をオールドミスの上司と同列に並べている。

さらに、オナとマリジャは対照的に描かれるが、そもそも作者は女性を二分して描く視点を持っている。ヴァセリジャの場面で、他の二組のカップルが登場する。女性の名はアレナと、ジャドヴィジャである。(15)アレナは稼いだ金を服に使って、精一杯着飾ってきている。「彼女はそんなに高慢でなければ本当に美しいのに」とあるのに対し、ジャドヴィジャは背が低く、いつも人目につかないようにしている女性で、病気の母と妹を三人抱えており、上等な服を身につけるわけにはいかない。そんな彼女を、「美しく、謙虚」と描写する。この章はこれから始まる物語の人物紹介を兼ねた章なので、当然視点は作者のものである。このように、女性に対するステレオタイプを利用することにより、作者はマリジャに対する読者の反応を誘導している。

社会主義に目覚めた後、ヨーギスはホテルマンとしての職を手に入れ、オナの義理の母とその子どもたちと暮らし初める。そのとき「それが新しい家庭（ホーム）であり、そこでヨーギスは暮らし、彼の教育は完了した」(384)とある。マリジャは彼の申し出を断り、娼婦を続けるというし(393)、「新しい家族」の構成員は亡くなった妻の義理の母とその子どもである。家族は有するが、扶養義務というマンフッドとは抵触せず、ヨーギスにとって、言ってみれば何の責任も感じる必要のない家族である。

このような点に留意して作品を振り返ってみると、家族にまつわる描写がいかに多いか見えてくる。作品冒頭、結婚式は「母国の伝統（ホーム・トラディション）」に従っていなければならないし、ヴェセリジャのおこなわれる部屋には三つの飾りしかないが、その家の一つが「メッキの枠のついた家系図」(7)であり、借金をしても自分たちの家を持たなければならない。そうした「家庭」や「家族」というものが、ヴェセリジャの意味によって補強されるとき、主人公ヨーギスは、彼のマンフッドとあいまって、家族という共同幻想を自ら信じるしかなくなるのである。しかし、作者はそのマンフッドを批判する視点を持ち合わせてはいない。家族を守らねばならないと言う幻想は、彼を縛り付け、

苦しめる。この幻想から解放されれば、あれほど苦勞して働くこともない。ところが家族の者が死んでしまった。ヨーギスは社会主義に会うまで本当の意味で自由にはなれないはずであったが、妻と子が死に家族から解放されると、図らずも自由になってしまう。しかし、この自由は本当の自由ではないはずだ。おそらく作家シンクレアを悩ましたのはこの点であっただろう。

前にも述べたが、シンクレアは24章、缶詰工場経営者ジョーンズの息子との出会いの場面辺りから詰まってしまう、書けなくなったという。シンクレアの頭では、社会主義の目覚めに向かってシナリオは着々と進んでいるはずであった。ヨーギスは社会主義に目覚め「新しい男」になるはずだったのだ。ところが逃げだした22章で「新しい男」に生まれ変わってしまい、作者の実は大きな目的を達してしまったものだから、あとが続かなくなってしまった。それ故強引な結論に向け、こじつけていかざるをえなくなってしまったので、キャラクターの厚みも失われ、自分でも避けるつもりだった社会主義の演説で作品をしめくくるしかなかった。本当の所は家族から解放されるだけの物語であることを彼は認めたくなかった。それ故マリジャを悪役に仕立て、理想の社会主義へと主人公を駆り立てる物語を捏造しなければならなかったのだ。家族からは解放されるが、幻想のマンフッドは傷つかない。マンフッドの重圧から逃れたいという、作者の欲求の解放へと向かうベクトルと、男としてマンフッドを全うしなければならず、重圧から逃れるためにはそれなりの理由がなければならぬと考え、素直な欲求を隠蔽しようとするベクトルの、二つの相いれないベクトルが衝突することになる。この作品の後半部の破綻は、その結果であると考えることができるだろう。

IV

シンクレアの父は、南部の名家の出であるにも関わらず、アル中で稼ぎが無く、シンクレアは母の実家の援助で暮らし、それ故母を守るために、幼少より雑文を書き、家計を支えていた。また、母の紹介で知り合ったメタとは恋愛関係になったものの、結婚は望まず、また結婚後も、文学の傑作をものするため、赤貧の暮らしをしようとして、妻と対立することが多かったようである。¹³ 自伝的作品『愛の巡礼』(1911)の中で、メタをコリドン、自分をシルシスと、ギリシャ古典の牧歌、もしくはミルトンの『ラレグロ』に出てくる二人の羊飼いの名で読んでいるが、この二人の関係をフロイド・デルのように「煩わしいセックスのことを考えずにすむ、牧歌的で擬似少年的な仕事と思考の仲間関係」と考え、¹⁴ シンクレアが性的関係に陥らない対等の関係を願っていたと考え

るのは難しい。むしろ、彼の自伝の記述にもかかわらず、彼の手紙から「性的欲望に狂わんばかりだったという事実と、彼の結婚が主従関係であることを願っていた事実がわかる」というハリスのことばに説得力を感じるのである。¹⁵ ともかく『ジャングル』執筆に関わる期間、妻との関係が崩壊へと向かっていたことは事実のようだ。『ジャングル』が出版され、金銭的余裕もでき、名も売れるようになると、メタとの破局は明白になり、1912年には離婚している。

デルやブラッドワースは、『ジャングル』の前の作品、『マナサス』（1904）についてこのように述べている。「黒人奴隷制は口実だった。解放されねばならないのは彼自身だった」のであり、¹⁶「戦争の小説を書き、その過程でアボリシヨニズムという観念上の覆をまとうことで、本質的に保守的な南部のルーツからシンクレアは自分自身を解放することができた」のだ。¹⁷

デルとブラッドワース二人の言葉を借りれば、シンクレアはついうっかりと、苦しい結婚生活から解放される願望充足物語を描いてしまった。だが作品の広告を派手に打ち出してしまった以上、後には引けず、作品の後半部をプロパガンダにしてまで社会主義への目覚めの物語を書かざるを得なかった。そのためこの作品は正直言って破綻していると私は考えている。しかし、だからこそ、隠蔽と解放という私の主題にとって魅力ある作品となったのである。

注

1. Cited in Ronald Gottesman, "Introduction," in Upton Sinclair, *The Jungle* (1906; rpt. New York: Penguin Books, 1985), p. xvii. また作品からの引用は、全てこの版による。
2. Michael Brewster Folsom, "Upton Sinclair's Escape from *The Jungle*: The Narrative Strategy and Suppressed Conclusion of America's First Proletarian Novel," *Prospects* 4 (1979), pp. 245-46.
3. Cited in Folsom, pp. 244-5.
4. Van Wyck Brooks, *The Confident Years: 1885-1915* (London: J.M.Dent & Sons, 1952), p. 222.
5. Granville Hicks, "The Survival of Upton Sinclair," *College English*, January 1943, p. 213 and William A. Bloodworth, Jr., *Upton Sinclair* (Boston: Twayne, 1977), p. 60.
6. Jon A. Yoder, *Upton Sinclair* (New York: Frederick Ungar, 1975), p. 48.
7. Leon Harris, *Upton Sinclair: American Rebel* (New York: Thomas Y. Crowell, 1975), p. 75.
8. Yoder, p. 45.

9. Folsom, p. 248.
10. Upton Sinclair, *The Autobiography of Upton Sinclair* (New York : Harcourt, Brace & World, 1962), p. 110.
11. Bloodworth, p. 55.
12. Ibid.
13. このあたりの事情については、前出のHarrisによる伝記や、Floyd Dell, *Upton Sinclair : A Study in Social Protest* (1927 ; rpt. New York : AMS Press, 1970)が詳しい。
14. Dell, p. 69.
15. Harris, p. 41.
16. Dell, p. 103.
17. Bloodworth, p. 40.